

I セミナーの実施概要

1. セミナーの名称

第8次鷹栖町総合振興計画策定と進捗の報告セミナー

「笑顔 幸せ みんなでつくる あったかす」

2. セミナーの目的

鷹栖町では2018・2019の2カ年をかけて、まちづくりの最も基本となる「第8次鷹栖町総合振興計画」を策定した。

計画策定の過程においては、これからのまちづくりを住民とともに進めるべく、様々な形で意見交換を行いながら鷹栖町の将来像を作り上げた。

本セミナーでは、新しい総合振興計画について広く住民にお披露目するとともに、それぞれが「自分事」として将来像の実現に関わることの大切さ・楽しさについて学ぶ機会とする。

3. 日時・場所

日時：令和3年3月17日（水） 18：30～20：30

場所：鷹栖地区住民センター ふらっと

4. 参加者数 55名

5. プログラム内容

司会・コーディネーター：一般社団法人北海道総合研究調査会 五十嵐智嘉子 理事長

（1）第1部 総合振興計画の紹介

- ・説明者：鷹栖町総務企画課 山原章由 参事
- ・内 容：計画策定の経過と計画の概要説明

（2）第2部 基調講演

- ・題目：「住民が動かし、行政が支えるまちづくり」
- ・講師：一般社団法人つながる地域づくり研究所 代表理事 一井暁子 氏（オンライン講演）

（3）第3部 パネルディスカッション

- ・テーマ：みんなでつくるあったかす 私たちの決意
- ・登壇者
膳法 法幸 氏（総合振興計画策定委員会委員長）
秋山 春雄 氏（総合振興計画策定委員会副委員長）
内藤 直子 氏（住民WS未来をつくる会参加者）
平林 悠 氏（住民WS未来をつくる会参加者）

- ・進行・コーディネーター：一般社団法人北海道総合研究調査会 五十嵐智嘉子 理事長
- ・コメンテーター：一般社団法人つながる地域づくり研究所 代表理事 一井暁子 氏
(オンライン参加)

(4) 連携の決意

- ・テーマ：あったかすにさらに磨きをかける 10 年に
- ・発表者：谷 寿男 鷹栖町長

Ⅱ セミナーの内容

1. 第1部 総合振興計画の紹介

鷹栖町総務企画課の山原章由参事が、総合振興計画策定の経過と計画の概要について、配布資料（第8次鷹栖町総合振興計画「概要版」）及びスライドを使用して説明を行った。



〔説明要旨〕

- ・本総合振興計画は、住民参加のプロセスを重視して策定し、そのために、「まちづくりに関するアンケート調査」や、分野別ヒアリングとして35団体41件の面談による聞き取り、まちづくりセミナーを含め30回を超えるワークショップ等を実施した。計画の策定は、それらの過程でいただいた意見を反映する形で行った。
- ・地区ごとのワークショップでは、各々の地区の暮らし方を話し合い、地区の資源マップを作製した。
- ・こうした過程を通じ、鷹栖町は、あらゆる立場の町民がライフステージにかかわらず、一人ひとりの暮らしの希望を実現し、幸せを実感できる地域社会の実現を目指すという理念のもとに、まちの将来像を「笑顔 幸せ みんなでつくる あったかす」と設定した。
- ・本計画では、まちづくりを他人事ではなく「自分事」として取り組んでいく覚悟が必要であるとの考えから、基本構想の中に、「町民の決意」、「行政の決意」、「連携の決意」という3つの決意を盛り込んだ。
- ・基本構想をもとに、「人が輝くまち」、「幸せな暮らしを実現するまち」、「幸せなしごとをつくるまち」、「幸せな環境を持続するまち」、「幸せな交流があるまち」という5つの基本目標を定め、それに対応した9つの政策と22の施策を位置づけた。
- ・さらに、分野横断的な重点施策として、「子どもに寄り添うまちづくり」、「健康のまちづくり」、「農業資源を生かしたまちづくり」、「市街地エリアの魅力づくり」、「地域経営の基盤づくり」の5つの施策を設定し、現在、各々の施策がスタートしたところである。
- ・本総合振興計画の策定にご参加いただいた皆様に改めて御礼を申し上げます。

2. 第2部 基調講演

「住民が動かし、行政が支えるまちづくり」と題し、一般社団法人つながる地域づくり研究所 代表理事 一井暁子氏が、スライドを使用して基調講演を行った。

なお、一井氏の講演は、オンライン（Zoom）を活用して行われた。

〔一井暁子氏のプロフィール〕

- ・2007年より岡山県議会議員を務めた後、2013年に岡山市を拠点とするローカル・シンクタンク「一般社団法人つながる地域づくり研究所」を設立。自治体と民間、住民をつなぎ、地域の課題を解決する支援活動に従事。
- ・岡山県奈義町において、地方創生総合戦略の策定を支援した後、住民とともに戦略に位置づけた内容の事業化を進めるための基礎作りを行い、現在、住民がその事業に取り組んでいる。



[基調講演要旨]

- ・主に岡山県奈義町の事例になるが、鷹栖町の皆さんに、まちづくりの大切さと楽しさについて参考になるような事例をお話したい。
- ・紹介する事例は次の3つであり、順次お話ししていく。

- ①「障害を持った子どもたちの居場所をつくりたい」というお母さんたちの想いを形にした「みんなのおうちぽっかぽか」の取組（岡山県奈義町）
- ②「お店や事業所もまちづくりに参加したい」という想いを形にした「ナギフト制度」（岡山県奈義町）
- ③「地区のファンを増やして、地区を元気にしたい」という想いを形にした「一般社団法人南さいはく」の取組（鳥取県南部町）

- ①「障害を持った子どもたちの居場所をつくりたい」というお母さんたちの想いを形にした「みんなのおうちぽっかぽか」の取組について（岡山県奈義町）



- ・今回、鷹栖町が総合振興計画を住民参加で作ったように、岡山県奈義町でも地方創生総合戦略を町民参加で作った。当時、奈義町には障がい者を対象とした事業所がなく、「障害を持った子どもたちの居場所をつくりたい」というお母さんたちの想いを受け、総合戦略の中で町が応援するということになった。
- ・それではどんな場所が良いかについて、お母さん方が勉強を始めたが、その参考事例として、「富山型デイサービス」を参考にした。富山には、どんな人でも気軽に訪れて良い場所がたくさんあり、その取組を参考にするため、10月に関係者を講師に招き、12月にはお母さん方や町の保健師などとともに、富山に視察に行った。

- ・富山では、高齢者も、子どもも、障がい者も、誰もが集える家のような場があった。視察後は、それらを参考に、短期間で「こういう場を作りたい」という想いを反映した計画を作り、翌年5月には「みんなのおうちぽっかぽか」がオープンした。
- ・運営は、お母さんたちの団体を中心にした協議会組織を作り、そこに行政も参加し、体育館を会議室にしてスペースを作り、資金は行政が協議会に支援する形とした。
- ・「みんなのおうちぽっかぽか」は、障害がある子も無い子も関係なく、年齢の小さなから大きな子までが居られる場となり、友達に会って一緒に遊んだり、大人と交わったり、宿題をやったり、好きなことが出来る場ができた。
- ・お母さんたちの想いから出発し、行政と共同で検討を行い、資金は行政が応援する形で、想いが形になった事例である。

②「お店や事業所もまちづくりに参加したい」という想いを形にした「ナギフト制度」 (岡山県奈義町)



- ・20店舗ほどの商店がポイント制度を導入し、加盟店を増やすだけでなく、ポイントを使ってまちづくりを応援できないかと考えたことが出発点であり、それを聞いた役場の若手がアイデアをまとめ、商店や商工会の関係者に説明を行った。しかし、そのアイデアに対しては、「役場は商店のことがわかっていない」と厳しい指摘を受けることとなった。
- ・その後、役場は商業者等の声を聞く場を設け、毎週のように話し合いがもたれるようになった。当時、ポイント制度の導入時期は決まっていたが、それを延期しても構わないから、とにかく話し合い、納得のいくものを作ろうという方向になり、商工会青年部も検討に加わり、和やかな雰囲気での話し合いができるようになった。
- ・その後の検討を経て、ポイント、電子マネー、プレミアム商品券が1枚のカードの中に入った全国初のカード「ナギフトカード」を発行する事業がスタートした。買い物ポイントのほか、行政ポイントカードとしても活用でき、健康ポイント、ボランティアポイント、イベントへの参加にもポイントが付く。全町民に発行されたため、子どもも自分のカードを持ち、子育て支援施設でカードを出すと、自分のカードにポイントを貯めることができる。カードは町外の人にも発行しており、買い物の利便性向上に寄与している。

- ・この取組は、事業者の想いから出発し、行政がそれを引き取ってしまったが、もう一度一緒にやろうという形で再スタートとした結果、良い形になった例である。
- ・体制としては商工会やポイント制度を使う商店など約 60 店舗が参加する大きな事務局を作り、行政、商店、町民の代表も参加して運営している。行政ポイントも加盟店のような形でお金を出しており、事業者と行政がともに資金を出し合って運営されている。

③「地区のファンを増やして、地区を元気にしたい」という想いを形にした「一般社団法人南さいはく」の取組（鳥取県南部町）



- ・鳥取県南部町は、小規模多機能自治の取組が早くから行われた地域であり、南さいはく地域は南部町の中でもトップを切って、平成 19 年に地域振興協議会を立ち上げた地域である。従来、町内会等がやっていた取組を取りまとめ、部を作って進めていくこととした。
- ・南さいはく地区は、柚子やえごまなどの産地であり、それを加工して羊羹やえごま油など特産品を作り販売する事業や、キャンプ場の指定管理者としてキャンプ場の予約受付の業務を振興協議会が行っている。
- ・キャンプ場には都市部からも人が来るようになり、特産品を買ってくれる人やキャンプに来る人などにこの地域にファンになってもらおうと考えるようになった。
- ・それらを事業として行い、収益も上げていくには法人格が必要なため、現在、一般社団法人を設立する準備をしているところである。
- ・ビジネス的な要素が入ってくると、行政は支援にくい面があるため、こういう活動を応援したいという東京のカメラメーカーと引き合わせをし、一緒にビジネス化の手伝いをしてもらっている。もともと地域の人を行政が応援していたところに、都市部の企業にも参画してもらうという取組をしている。事業計画のアドバイスをもらったり、手法を考えたり、オンラインも活用しながら話し合いをしている。そうした成果を生かして、特産品を売ったり、キャンプ客を増やすといった事業に役立てる方向である。
- ・この取組は地区の人の想いを出発点に、それを行政が支え、自分たちの地域を元気にしようという取組をさらに一歩進め、事業化していこうというもので、それを都市部の企業も応援するという新しいパターンといえる。

④まとめ

- ・これから鷹栖町の皆さんが、それぞれの想いを大事にしながら素敵なまちづくりを進めていかれると思うが、そんな時に色々なパターンで町民の皆さんと役場が手を携え、もしかしたら、都市部の人や起業が手伝ってくれるかもしれない。色々な方と手をつなぎながら、楽しんで、自分たちの気持ちを叶えるようなまちづくりを是非進めていっていただきたいと思う。

⑤質疑応答

質問者)

「ナギフト制度」の事例の中で、貯まった行政ポイントはどういう風に使われるのか？

一井氏)

ポイント自体は健康づくりやボランティア活動、イベントの参加、図書館利用、議会の傍聴など 60～70 種類のポイントが行政ポイントとして発行されている。買い物ポイントは、町内での買い物、食事、ガソリンを入れるなど、60～70 店舗での消費に応じてポイントが付与される。

ポイントの使途として一番多いのは、買い物ポイントが付く店舗でモノを買う際に使うパターンである。子や孫など、他の人にポイントを分けることができる仕組みになっているので、今後の企画としては、子どもたちが何かに取り組む時に、大人がポイントを与えて応援するといった使い方が考えられる。

質問者)

最初の事例から 3 つ目の事例まで、関わる人が増えていってコーディネートするのも大変だったのではないかと思います。実際に大変だったことを少しお聞かせいただきたい。

一井氏)

ナギフト制度の時は、役場の職員の方と一緒に考えたアイデアを意気揚々と事業者や商工会の方に説明したものの、完全に却下されてしまい、かなり落ち込んだ。しかし、そこから事業者の話を聞き、一緒に考えた結果、良いものができたと思う。住民と行政が一緒に何かやろうとする時、住民側の「これをこうしたい」という想いと行政の規則とがぶつかってしまうことが良くある。行政が住民の希望をまず聞いた上で、どうしたら現行の規則の中で進められるかを考えていただければ、先に進むことができるのではないかと思います。

3. 第3部 パネルディスカッション

「みんなでつくるあったかす 私たちの決意」と題し、総合振興計画の策定プロセスや将来像の実現に向けた具体的な取組に関わっている4名の住民が、計画策定に込めた思いや将来像の実現に向けた「決意」を発表し、参加者全員で共有した。

なお、進行とコーディネーターは一般社団法人北海道総合研究調査会の五十嵐智嘉子理事長が務め、基調講演を行った一般社団法人つながる地域づくり研究所の一井暁子代表理事がコメンテーターとして参加した。

[登壇者]

- 膳法 法幸 氏（総合振興計画策定委員会委員長）
- 秋山 春雄 氏（総合振興計画策定委員会副委員長）
- 内藤 直子 氏（住民WS未来をつくる会参加者）
- 平林 悠 氏（住民WS未来をつくる会参加者）

[膳法法幸氏 発言要旨]（総合振興計画策定委員会委員長）



- ・これまでも行政の会議には出たことはあったが、すべてお膳立てが出来ていた。今回、策定委員会の委員長を務めたが、従来の会議と全く違って台本はなく、あるのは町民アンケートの結果だけだった。
- ・一番大切にしたいのは、色々な町民の声、地域の実情、将来に向けての夢であり、様々なヒアリング結果が提示された。これらが10年間生かされるよう、策定委員会で議論し、計画に盛り込みたいと思った。委員は苦労はあったが、充実感があった。
- ・グループディスカッションでまちの将来像のキャッチフレーズを考えたが、どの案も意義深いと思った。
- ・鷹栖町には5つの地区があり、大きい地区は人口が3,000人もいる一方、北成地区は130人しかいない。しかし、みんなが北成地区に愛着を持っている。そういう気持ちをキャッチフレーズに出したいと思った。
- ・ワークショップの中で、10年後の鷹栖の姿を実現するには何が必要かという議論をした。これまでは町民は何もしなくて良かったが、これからは協働、参画が必要であり、2つの部会を設けて真剣に議論した。深夜近くまで話し合ったこともある。

- ・初めて策定委員長を務め、苦労は感じなかったが、有難いと思った。皆さんに感謝したい。
- ・鷹栖市街地の未来を考えるワークショップに参加している。
- ・地方共生型複合施設があったら良いと思うが、複合化するメリットはどこにあるの？という指摘を受けた。住民と行政と一緒に話し合っていかなければならないと思う。
- ・ワークショップに若い人の参加が多かったのが嬉しかった。この鷹栖に住み続けたいと考える人は30代が一番多かった。そういう人の活躍がまちには必要だと思う。
- ・ここに住む以上は何らかの役に立ちたいと思っている。それが自分自身のためにもなる。

〔秋山春雄氏 発言要旨〕（総合振興計画策定委員会副委員長）



- ・鷹栖町に住んで12年になる。北成地区は人口が3〜4割減り、世代交代が進まないで、高齢者が63%を占める。自分は73歳だが、若い方である。
- ・自分がこの北成地域に住み続けるのであれば、住みやすい地域になってほしいとの思いから、総合振興計画づくりに携わりたいと思った。
- ・今後、人口は減り、行政職員も減る。行政に頼らず、自分たちでやっていかなくてはならないと思う。
- ・おかげさまで総合振興計画は良い形でまとまったと思う。策定過程で色々な人の話を聞くことができ、成長できたと思う。策定メンバーが真剣に互いの意見を出しながら検討した結果、まとまったこの計画は自分のものだと思っている。1つでも計画を実現したいと考えている。
- ・この2年間は自分の人生の中で一番勉強したかも知れない。「自分事」として、色々気づかせてくれた2年間だった。
- ・策定委員それぞれの方の物の見方、切り口はとても参考になった。
- ・基本目標は5つあるが、そのいずれにも「幸せ」という単語が入っている。目標を達成するために何を克服しなければならないのか、それが文章化され、計画書にまとめられた。自分自身の気持ちもその中で整理できたと思う。
- ・北成地域が地域運営組織モデル地区になった。公民館を核にしながら、新たな地域づくり活動をどうしていくかを考えたい。
- ・公民館の活動には制約があるが、地域には利益を生む活動も必要。公民館でそうした活動をするのはご法度だが、地域の人が学んだら、対価として利益が得られるような仕組みは必要だと考える。

〔内藤直子氏 発言要旨〕（住民 WS 未来をつくる会参加者）



- ・「コーディネーショントレーニング」の普及と指導を行っている。「コーディネーショントレーニング」は、神経と運動の発達にそって脳と心と体に刺激を与える指導法であり、8年前、遊びの中で楽しく体を動かすことを目的とした会に子どもと一緒に参加し、そこで「コーディネーショントレーニング」に出会い、もっと知りたいと思って研修を受け、普及活動を始め、6年になる。
- ・少しずつ、保育や教育の現場でも「コーディネーショントレーニング」に共感してくれる人も増えて浸透しつつあり、3年前に「鷹栖町 COT 実践研究会」を組織した。現在は、保育園、小中学生、高齢者の会などにお邪魔して教えている。
- ・「コーディネーショントレーニング」が実際に町にどのくらい浸透しているかを知りたくて、住民ワークショップに参加した。
- ・ワークショップでは、全く知らない人と一緒になり、鷹栖の良いところを話しあう機会があり、大変有意義だった。
- ・鷹栖の魅力はやはり「人」だと思う。ワークショップを通じて、鷹栖にはとても魅力的な人が多いと感じた。
- ・自分自身は子育て中に身近な人やボランティアの方に助けられた。改めてたくさんの魅力的で素晴らしい方に助けもらったことを認識した。
- ・コロナ禍で、子どもたちの様子に違和感を感じている。心が折れそうな1年だったが、「コーディネーショントレーニング」を小学生や中学生、幼児にも体験してほしい。小学生は体力テストと「コーディネーショントレーニング」を組み合わせて効果を実感してもらいたい。

〔平林 悠氏 発言要旨〕（住民 WS 未来をつくる会登壇者）

- ・ワークショップに参加してみて、本当に鷹栖は「人のまち」だと思った。みんな鷹栖の町が好きで、人が魅力のまちなのだと感じた。
- ・現在、米農家をする傍ら、移住の相談にも乗っており、農家になりたい人や移住を考えている人からの相談が来る。自分も移住の際には役場の方にとってもお世話になった。
- ・鷹栖は人が魅力のまちなので、魅力的な人を鷹栖に引っ張ってこようと考えている。自分の住んでいる地区に村を作り、仲間を呼ぶ計画をしたい。
- ・一人の町民として、楽しくこの町で過ごしていけたらと思っている。

- ・これからやりたいことが3つある。まず、米の生産で、魚沼産コシヒカリ以上の米を作り、鷹栖でブランディングしたい。次に、「YouTuber よりも農家になりたい」という子を育てたい。職選びの条件は、お金が稼げて楽しいことだろう。農を魅力的な産業にしていく必要がある。3つ目は、村を作り、魅力的な人を集めたい。自分のまわりには起業家が多い。たくさんの人に支えられて仕事しているので、人を紹介したり、起業の支援をしたいと思っている。
- ・鷹栖は意外と便利な町であり、今後、人口は増える可能性もあると思う。対外的に鷹栖をアピールしていきたい。



〔一井氏コメント要旨〕



- ・鷹栖町では総合振興計画の策定に向けたワークショップなどが人同士の出会いの場になっていたことがわかった。人が出会えば、想いも一緒に会うことになる。出会いから共感が生まれ、「一緒にやろうよ」というふうにつながっていく。
- ・まずは、皆さんのやりたいことを実現することが必要だと思うが、次の3つのことをして欲しいと思う。
 - ①町民の皆さんが自身の想いを発表できる場を作る
 - ②それを皆さんに知ってもらう機会を作る
 - ③それに関わりたい人が参加できるような仕組みを作る
 この取組が、「あったかす」を作ることになると思う。

4. 第4部 連携の決意

セミナー全体を振り返り、谷 寿男鷹栖町長が「あったかすにさらに磨きをかける 10 年に」をテーマに、「連携の決意」を表明した。



[谷町長 発言要旨]

- ・総合振興計画（概要版）の 16 ページに「まちづくりへの決意」が書かれており、その中の「町民の決意」の部分に「小さな一歩であったとしてもできることから」という一文があり、このフレーズが大好きである。小さくても自分たちができることを重ねていくことが大切だと思う。
- ・本セミナーの中で「鷹栖の魅力は「人」だ」という発言があったが、そう言われたのは大変嬉しい。人と人との結びつきが非常に大切である。
- ・持続可能なまちをつくる上で、財政的にはこれまでのようなまちづくりは難しい。住民にも共同参画をしてもらい、どんなまちづくりをするのかを考えてもらいたい。「連携の決意」が非常に大切になる。そのためには行政としての説明責任が重要である。
- ・ふるさと納税が 1 億 2 千万円になった。こうした関係人口や町を訪れてくれる人も大切にしていきたい。
- ・内藤さんや平林さんのチャレンジ、さらに、本町出身でおといねっふ美術工芸高等学校を卒業した加藤瑛瑠さんはかつて「工芸甲子園」で日本一に輝いたが、このたび本町に戻り、木工芸や文化の村を作りたいと頑張っている。まちづくりを「自分事」と捉え、新しいチャレンジをしている皆さんは素晴らしいと思う。
- ・行政だけがまちづくりをするのではない。中心には町民がいる。関係人口も含めて、ワンチームにしていきたい。
- ・今日のセミナーで皆さんの話を聞いて、明るい未来が見えてきたように思う。